

Follow-up Journal

令和5年度第4回人権問題都民講座

「ファッション×人権—着ること・着るものから考える みんなの尊厳が守られる社会」フォローアップジャーナル

講師：徳永啓太

2024年3月8日（金）の都民講座終了後、講座内容を踏まえて、徳永啓太講師にインタビューを行いました。

—今回の講座のサブタイトルには「着ること・着るものから考える みんなの尊厳が守られる社会」とありますが、徳永さんが「着ること、着るもの」を楽しむようになるまでのことを教えてください。

子供の頃は、親に服を着せてもらっていました。それでも、「これが着たい」というこだわりはあったと思います。自分で服を着られるようになったのは、小学2年生の時に股関節の手術を受けたのがきっかけです。そこで1年間、親元から離れ手術と入院とリハビリを行う集団生活をしました。いわゆる自立支援ですね。そこで、医学療法士の方に「こうやったら着やすいよ」と、独力で服を着る方法や工夫の仕方を教わりました。これが今でも活かされています。

—その後、小学校・中学校ではどのように過ごされていたのでしょうか。

僕は、小・中・高、ともに普通学校に通いました。30年前の日本では、障害がある子供は特別支援学校に行くのが主流でした。でも、僕はまひがあってもこのようにコミュニケーションを取ることができたので、両親が普通学校に通わせたいと考えたんですね。当時は珍しいことでしたから今となっては両親に感謝しています。

最初は学校側も、「なにかあったら責任がとれない」と言っていたようです。「だったら」ということで、母が教室の後ろにずっと座っていて、必要な時にだけ出てきて僕のことを手伝うことにして、普通学級で学びました。そのうち、担任の先生も、どういう時にどのような支援が必要かわかってきて、「これならわかるんで、お母さんはもう大丈夫ですよ」と言って、母が教室にいる時間がどんどん短縮されていって、最後は送迎だけになっていきました。

—具体的にファッションに興味を持ち始めた時期はいつ頃でしたか。

大学生になってからですね。中学・高校は制服を着ていましたから、大学で初めて私服で学校に行くということになって、着るものを選ぶ必要が出てきた。大学内では車いすユーザーは僕ひとりだけだったので、やはり車いすに乗っているということで人から見られるんですね。見られるのであればおしゃれをしてみようかな、と思ったことがきっかけです。

―徳永さんが講座で紹介された doublet（ダブルレット）のコレクションですが、どのようなきっかけで徳永さんとブランドとの協働が始まったのか、改めて教えてください。

doublet のデザイナーの井野将之さんが、東京2020パラリンピック競技大会の車いすバスケットボールの試合を見てすごくカッコいいと思ったことがきっかけで、車いすの人と何かできるんじゃないかということで僕に連絡がありました。

色々な話をしましたが、「多様性をうたう社会である限り、多様性が達成されている社会ではない」ということを言ったんです。そしたら井野さんがこの言葉にとっても感動してくださった。そこで、まずは僕のための服を作って、それが誰にでも着られるような服になったらいい、という発想でデザインをしたそうです。例えば、僕がジャケットを着る場合には、車いすに座っているからジャケットの丈の長さは短いほうが良い。それは、最近の Y2K のトレンド（2000年前後に流行したファッションのリバイバル）である、若者向けの「へそ出しルック」としても着ることができるんです。

―徳永さんがモデルとして参加された doublet のファッションショーでは、障害のないモデルと共に、義足を使用している方などもモデルとして参加されていました。一方で、皆さんは同じお面を被っていましたが、どのような意図が込められたショーだったのですか。

本当はパリに行く予定だったのですが、パリがコロナでロックダウンしてしまって、急遽日本で、デジタル配信形式のショーを行うことになったそうです。モデルは、バーチャルヒューマンの imma（イマ）の顔を、デジタルではなく実物のお面にしてかぶっています。障害のないモデルプラスサイズのモデルや、LGBTQ+の当事者であることを公表しているモデル、低身長モデルや、車いすの僕が、顔だけを同じにしてランウェイを歩くことで、いまだにファッ

ョンやこの社会全体の「多様性」が実現できていないことを示す意図がありました。

—今日の講座では世界のファッションと人権に関する取組を紹介されましたが、日本におけるファッションと人権に関わる取組についてはどのようにご覧になっていますか。

今日ご紹介したアーロン・ローズ・フィリップスやシネイド・バークは、ファッションを権利として主張していましたよね。一方、日本においては、例えば「ファッションと障害」というテーマでの取組ももちろんたくさん行われていますが、「選択肢を与えてくれてありがとう」とか、「車いすに乗っていてもおしゃれができるよ」といったプライベートな「楽しみ」がゴールに設定されているような気がします。それだと、講義の初めに話した、健常者側の「思いやり」や「自己満足」で終わってしまうのではないかと思います。

—徳永さんは、川内美彦さんのご著書を起点に、「バリアフリーは当事者へのやさしさ・思いやりだけでなく、権利や尊厳という価値観によって平等な社会参加を可能にするためのもの」という言葉を引用したうえで「バリアフリー」を「ファッション」に置き換えて考える可能性を提示されていましたね。「やさしさや思いやり」ではなく「平等な社会参加」とは、具体的にはどのようなことでしょうか。

例えば、「思いやり」で終わってしまっている例として僕が覚えているのは、あるテレビ番組の中で、プロの野球選手が、野球が好きな障害者とキャッチボールをしてくれるという企画です。有名な選手とキャッチボールをするためにその障害者はたくさん練習をして、実際にキャッチボールをする。それを見て、これってずるくない？って思いました。

自己実現は確かに大事ですが、この事例はその人が頑張ったからでもなければ、あるいは、その人に権利が与えられたというわけでもない。特別扱いされたことによって設けられた1回限りの思い出作りの機会ですよ。確かに、1回限りなら協力する側も頑張れると思う。でも、そういう1回きりの自己実現ではなくて、例えば野球チームに入って継続的に他の人と平等に近いかたちで野球ができる権利をこそ、主張していく必要があるんじゃないかと思っているんです。シネイド・バークもいうように、服を選べることや、モデルとして仕事をする、フ

ファッションにマイノリティの声が反映されることも、生きていく上での権利であるという理解が重要だと思います。

—今回の都民講座を振り返って、改めて伝えたいことはありますか。

講座では、ファッションの多様化と民主化がすごく進んでいるかのように聞こえるお話をしました。でも、実際の4大コレクションはどうかというと、例えば、一番最近（2024年3月8日現在）2024年秋冬シーズンにファッションショーを行ったブランドは、パリで181ブランド、ミラノで100ブランド、ニューヨークで70ブランド、ロンドン84ブランドでした。その中で、車いすに乗っているモデルがランウェイを歩いたのは2人くらいです。僕が協力したdoublet（ダブルレット）の事例も2022年のものですし、本当に数えるほどしか事例がないんです。

—まだ非常に少ないんですね。

プラスサイズモデルの場合も、penオンラインの記事（「4大コレクションのランウェイを歩いたプラスサイズモデルは少数…ファッション業界の動向は？」（2022.11.15、文：能勢奈那））によると、2023年春夏コレクションのランウェイを歩いたプラスサイズモデルはニューヨークでは4400人中49人、ロンドンでは4000人中45人、ミラノでは2400人中15人、パリでは3200人中33人」ということです。つまり、約1%なんですよ。

ファッションの「多様性」や「民主化」はもちろん進歩してはいるけれども、現状の取組は不十分で、まだまだ先は長いんです。社会の構造を理解したうえで、個人のプライベートな自己実現を超えて、ファッションを権利として主張していくことが必要だと考えています。

2024年3月8日(金)インタビュー（都民講座終了後・東京都人権プラザにて）

聞き手：公益財団法人東京都人権啓発センター 専門員 村上由鶴

テキストの無断転載・無断使用を固く禁じます。